オリエントでの自分探し
― アンネマリー・シュヴァルツェンバハの『幸せの谷』 ―

武田良材

はじめに

アンネマリー・シュヴァルツェンバハ（1908·1942）の著作のなかで最高傑作であろう長編小説『幸せの谷』[1]（1940）は、「長編小説」というなんでもない副題がふさわしくないような、説明不足のおぼろげな物語である。読者には主人公の名前も性別も知らされず、[2]「わたしたち」といった代名詞の指示するものがしばしば判然としない。主人公の寄る辺ない心情がただもの憂げに語られてゆく。その茫漠たる文体は、危うく崩れ落ちかねないところで絶妙にバランスを取って、強烈な魅力を放つ。

この小説の下書きにあたる随筆風の断片集『ペルシアでの死』（1995）には、この捉えどころの無さを端的に表わす箇所がある。「世の果て ― 」という先行する章に呼応して「 ― そして力尽きた人」と冠された章は、「もし人が力尽きればどうなるだろうか？（病気でなく、痛みがなく、不幸でもなく、もっと悪い）」[3] と、他人に伝えがたい苦しみを語る一文で始まる。これを手がかりに、『幸せの谷』もまた力尽きた主人公が死への誘惑を克服し再生する物語だと解釈できるが、力尽きた理由が明示されないことから、晦渋な印象を与える。本稿で筆者は、作者シュヴァルツェンバハが力尽きた最大の理由を、家族の親ナチス的なありかたと自身の反ナチス活動との間の板ばさみに見出し、この板ばさみを解説するが、しかしながら世間に腑に落ちぬ自殺が多いこともまた見逃せない。こうした死への憧憬を『幸せの谷』のなんとなくつらいといった曖昧さは、うまくすくい上げている。

---

[1] Schwarzenbach, Annemarie: *Das Glückliche Tal. Roman.* Frauenfeld 1987. 以下これについては [ ]で引用ページを指示する。

[2] 研究者によって男性として扱う場合（主人公について男性名詞が使われている箇所があるため）、女性として扱う場合（同性愛小説として読めるため）、わからないと断言する場合があり、そのように立場が分かれることからして、性別は断定できない。

[3] Schwarzenbach, Annemarie: *Tod in Persien.* Basel 1998, S.37. シュヴァルツェンバハは草稿にとどまっていた『ペルシアでの死』を材料にして『幸せの谷』を仕上げた。完成度に歴然たる差はあるが、理解の助けとなる限りにおいて前者からも引用する。

この茫漠とした雰囲気をもたらすのが、スイスのアルプスに親しんだ主人公にとって際立った対照をなす、異郷の地の荒々しい自然である。小説の舞台、イランのラール谷は高山病の恐れもある高地だが、テヘランの暑さとマラリアから逃れられる避暑地として利用され、作者シュヴァルツェンバハは新婚時に夫婦で滞在している。雄大で凶暴な自然と、主人公の果てしない寂寥感との融合が、この作品の見所である。冒頭のあたりを引用してみよう。

> わたしたちのテントはラール川の岸辺の草むした土手の上にある。谷底は海抜二千五百メートルで、ペルシャ湾よりずっと近いカスピ海の水面から測ると、さらに三十メートル高い。二千五百メートル、それだけでも大層な響きだが、実は大したことはない。なにしろ見回してみれば、山地や山脈がわたしたちの谷のはるか上に聳えている。〈中略〉ガレ場で絶え間なく石が流れるのが聞こえる。この単調でほんのかすかに聞こえる流れは、はるか遠くの尾根をかすめる風、あるいは名もなき峠道や獣道の筋によってわたしたちの谷から分断されているずっと下の熱い平地をかすめる見えない風のうなりを除けば、この荒野での唯一の物音である。[5]

これが主人公の幕営地で、そこから彼／彼女の意識は谷の風景をなめるように見回し、遺跡の発掘にたずさわっていた昔に立ち戻り、作者の恋人と同名でそっくりな女性ジャレ[4] との悲しい結末を迎えた恋をふり返る。すがるもののない主人公の焦りを描きつつ、それと不釣り合いに「幸せ」という言葉が持ち出されて奇妙な雰囲気を醸し出す。本稿では読者を戸惑わせるこの焦りと幸せについて考察する。

ところで、シュヴァルツェンバハは 1987 年の『幸せの谷』再刊をもっておよそ半世紀ぶりに再発見されたが、[5] 記念碑的出版としてこれが選ばれたのは、彼女の著作のなかで文学的に最も優れていると考えられているからで、この作品についての研究は数多い。それを簡単に振り返っておきたい。

再発見からおよそ十年を経て、1998 年にシュヴァルツェンバハの愛したエンガーディンで生誕九十周年を記念したシンポジウムが開かれた。[6] その間の目立った研究として、Areti

---

[4] 綴りは Jalé で、「ヤレ」と読むべきかもしれないが、映画『カフィリスタンへの旅（*Die Reise nach Kafiristan*）』（2001）に倣って「ジャレ」と表記する。二人の旅人たちは実際にはフランス語で意思疎通していたと考えるのが自然だが、この映画はドイツ語で撮影されている。

[5] 亡命作家たちの多くは 1933 年から 45 年までのナチス時代にドイツ国内で読まれる機会がなかったため、1945 年以降も忘れられたままで、例えばユルゲン・ゼルケによる伝記『焚かれた詩人たち（*Die verbrannten Dichter*）』（1977）などで再発見される必要があった。

[6] 報告書が出版されている。Willems, Elvira (Hg.): *Annemarie Schwarzenbach. Autorin – Reisende –*

Georgiadou の博士論文『遊牧民の逃路 — アンネマリー・シュヴァルツェンバハの世界』(1994) を挙げておきたい。これについて注目すべき点は、再刊版『幸せの谷』に詳細な伝記を添えたために影響の大きかった編者 Charles Linsmayer を克服する姿勢を打ち出していることである。[7] Georgiadou の甚だ挑発的な主張によれば、Linsmayer は Roger Perret らとのシュヴァルツェンバハ戦後初出版争いに「不幸にして」[8] 勝利したが、『幸せの谷』の編者 (Linsmayer のこと) にとって、『追放された心情』という類の解釈は許しがたい」[9] もので、すなわちこの作家を理解せず、ひどく過少に評価する。[10] 要するに女流作家蔑視の透けて見える Linsmayer の文章には反発が大きく、[11] 多彩な研究が展開されるに至る。先のシンポジウムでは、Katrin Lehnert が、旅は旅人自身が内面を見つめる作業であるとして、『幸せの谷』は「反・旅行記」(Anti-Reisebuch) で、主人公は疎外された状態 (fremd) に留まり続けると解釈している。[12] Sabine Rohlf はシュヴァルツェンバハの感じた追放感を「自己追放 (Selbstverbannung)」として同性愛の観点から読んで、世の果てに辿り着いた主人公が最後に逃げ道を見出す物語であることを、[13] Sabine Lerner は『ペルシアでの死』と『幸せの谷』を比較し、主人公の性別などが曖昧にされ、疎外感が強められた変更を指摘した。[14]

Fotografin. Herbolzheim 2001.

[7] 再刊版には Linsmayer による最近になって単体で出版されたほど詳しい伝記が添えられ、恰好の入門書となった。Linsmayer, Charles: Leben und Werk Annemarie Schwarzenbachs. Ein tragisches Kapitel Schweizer Literaturgeschichte. In: Annemarie Schwarzenbach (1987) S.159-223. Linsmayer, Charles: *Annemarie Schwarzenbach. Ein Kapitel tragische Schweizer Literaturgeschichte.* Frauenfeld 2008.

[8] Georgiadou, Areti: *Fluchtwege einer Nomadin. Die Welt Annemarie Schwarzenbachs. Eine Untersuchung zu Leben und Werk.* Universität Frankfurt (Diss.) 1994 (Mikrofilm 1995), S.87.

[9] Ebd., S.98. 亡命文学者シュヴァルツェンバハを解釈する上では、親友だったクラウス・マンと同様に、「追放感」が鍵となると考えられているが、Linsmayer はそれを評価しない。

[10] 彼女はシュヴァルツェンバハをあまり評価しなかった Linsmayer の敗北を高らかに宣言する。「だがわたしは満足してこう確言する、彼女を少し目覚めさせただけですぐまた忘却の中に眠り込ませるという彼の狙いは失敗した」Ebd., S.99.

[11] 女流作家は自伝的にしか書けないなどの彼の主張が反発を招いた。フェミニズムおよび同性愛の視点での考察については次を参照のこと。Hendler, Bettina: Texte ohne Gewicht. Zum literaturwissenschaftlichen Umgang mit Annemarie Schwarzenbach. In: Linck, Dirck / Popp, Wolfgang / Runte, Annette (Hg.): *Erinnern und Wiederentdecken. Tabuisieren und Enttabuisierung der männlichen und weiblichen Homosexualität in Wissenschaft und Kritik.* Berlin 1999, S.385-402.

[12] Lehnert, Katrin: Die Darstellung der Fremde in der Prosa Annemarie Schwarzenbachs am Beispiel der *Lyrischen Novelle*, des *Glücklichen Tals* und der Novellensammlung *Bei diesem Regen.* In: Willems (2001) S.107-118.

[13] Rohlf は十分理解して留保を付けているが、主人公の性別が不明でありながら同性愛と解釈するのは強引である。Rohlf, Sabine: Exil und Fluchtlinien des Begehrens in *Das glückliche Tal.* In: Willems (2001) S.137-152. 博士論文で詳しく論じられている。Rohlf, Sabine: *Exil als Praxis – Heimatlosigkeit als Perspektive? Lektüre ausgewählter Exilromane von Frauen.* München 2002 (Diss., 2001).

[14] Sabine Lerner: Reisen ohne anzukommen. Selbstsuche und Entgrenzung in Annemarie

その後、シュヴァルツェンバハの著作が数多く出版され、それに伴って研究テーマも多様化したので、とりわけこの小説がよく論じられるということはなくなったが、2005 年の論集『アンネマリー・シュヴァルツェンバハ — 分析と未発表原稿』で、Tina D'Agostini はシュヴァルツェンバハがマルクス主義やファシズムといったイデオロギーのもたらす楽観的展望の反対側に目を向けていたことを、「影」というキーワードで浮き上がらせている。[15] 2008 年の論集『インサイド・アウト — アンネマリー・シュヴァルツェンバハの作品のテクスト志向調査』で、Sofie Decock と Uta Schaffers は誰が誰に話しているかわからないという混乱に焦点を合わせ、死者との対話は自分自身の言葉を聞く行為で、かつ時系列の失われた語りは人生の発掘という観点から、言葉や自我を喪失した状況が描かれていると主張し、[16] Melissa De Bruyker は図像学的分析を提示する。[17]

以上の研究に加えて、他の著作を扱ったもの、作者の活動を丹念に調べ上げたものがあるわけだが、ともあれ筆者が『幸せの谷』についてさらに重視すべきと考える点は二つある。一つは主人公の性別が意図的に曖昧にされていることで、そこには男でなければ女、女でなければ男という二分法を超えた世界が描き出されている魅力がある。前号の拙論[18] で詳しく紹介したとおりシュヴァルツェンバハ家において同性愛の敷居はかなり低いものであったのに、この小説での恋愛を敢えて同性愛として取り上げては、作品を損ない、男女の区別なく愛したシュヴァルツェンバハの恋愛観を矮小化することが懸念される。反ナチス文学と同性愛との結びつけはトーマス・マンやクラウス・マンの研究などで多用されて手垢にまみれた感もある。よってここでは異性愛か同性愛かにこだわらない。もう一点は亡命作家としての側面で、彼女の葛藤の大きな部分は反ファシズム活動であったのだから、それへの適度な目配りなくして彼女の闇の深さを知ることはできないだろう。これらを踏まえて、この小説を読み解いてみたい。

ラール谷

『幸せの谷』の読者には、次から次に素朴な疑問が浮かぶはずである。「わたし」は何者か、

Schwarzenbachs Roman *Das glückliche Tal.* In: Willems (2001) S.153-168.

15 D'Agostini, Tina: „Opposition zur hellen Welthälfte der Tatsachen". Annemarie Schwarzenbachs ‚Schatten'. In: Fähnders, Walter / Rohlf, Sabine (Hg.): *Annemarie Schwarzenbach. Analysen und Erstdrucke.* Bielefeld 2005, S.123-138.

16 Decock, Sofie / Schaffers, Uta: ‚Still –, kein Wort über die Toten dieses Landes.' Gespräche mit den Toten in Annemarie Schwarzenbachs *Das glückliche Tal.* In: dgl. (Hg.): *inside out. Textorientierte Erkundungen des Werks von Annemarie Schwarzenbach.* Bielefeld 2008, S.55-76.

17 Bruyker, Melissa De: Zwischen Raum, Bibel und Ich: ikonographische Entwürfe von Individuum und Kollektiv in Schwarzenbachs *Das glückliche Tal.* In: Decock / Schaffers (2008) S.77-102.

18 拙論：「アンネマリー・シュヴァルツェンバハにおける反ナチス — エーリカ、クラウス・マン、そして山との関係」：京都大学大学院独文研究室『研究報告』22 号（2008 年）、91-111 頁所収。

男か女か、「わたしたち」とは誰を指しているのか、誰が誰に向かって話しているのか、なぜ荒野にいるのか、などと。そういう曖昧さをおおらかに受け入れてしまうのが楽しみ方として一番よいだろうが、解釈のためにはせめて舞台のラール谷について客観的知識を持っていたほうがよいと思われる。なにしろ、作者はそこにあまりにも暗い心象風景を投影していて、誤解を招きかねないのである。

1935 年 5 月にテヘラン駐在のフランス外交官と結婚したアンネマリー・シュヴァルツェンバハは、8 月にイギリス公使館の招待を受けてラール谷でテント暮らしをする。この年、1935 年は 8 月までに結婚の他に麻薬中毒の療養と自殺未遂、マラリアの発症、不治の肺病を抱えるトルコ大使の娘ジャレ[19] との恋というスキャンダルなど、心身に大きな負担が度重なり、テヘランの夏はシュヴァルツェンバハにとって耐えがたかった。そのため避暑としてラール谷へ行くことになったのだが、時期からすればそれは新婚旅行でもあった。マラリア罹患とジャレとの恋は『幸せの谷』に書き込まれているが、ただし事情を知らぬ読者は不親切な描写にとまどうはずである。

さて、このラール谷は標高5,670メートルの休火山デマーヴァンドの火口の一部で、テヘランから七十キロメートル程のところにある。標高が高くて涼しいので、イギリス公使館員の夏のキャンプ地となっていた。シュヴァルツェンバハの体験から四十年以上も遡ることになるが、ガートルード・ベル（1868-1926）が 1892 年に初めて中東を訪れ、『サファル・ナーメ — ペルシアの情景、ある旅行記』（1894）という著書でラール谷を紹介しているので、それを紹介したい。ベルはオクスフォード大学の女子カレッジを二十歳で卒業した人で、歴史家でもあり、シュヴァルツェンバハとかなり似通ったところがあるし、シュヴァルツェンバハもやはり彼女に興味を持っていた。[20] ベルの風景描写はシュヴァルツェンバハに違わない。

> 創世のときより生あるものがその寂寞を乱したことはないかに見える、ある狭い渓谷の陰気きわまる底には、あるいは今日は黒い天幕が散らばり、馬と駱駝の群れが流れのほとりで草を食み、大気は犬の吠える声と女子供の叫びで満ちているかもしれない。だが明日、生命はそのしるしもとどめていない — 遊牧者は去り、静寂が外套のよう

---

[19] 幼ないころから肺が悪く、第一次世界大戦前はスイスのダヴォスで療養生活を送った。シュヴァルツェンバハがラール谷に滞在している間にテヘランにて死去。Schwarzenbach, Annemarie: *Tod in Persien*. Basel 1998, S.82ff.

[20] 近年までベルとシュヴァルツェンバハの類似性について強調はされてこなかったが、シュヴァルツェンバハはベルをかなり意識し、ベルの足跡を辿っていたようである。Kolo, Kanal Y. Odisho / Müller, Heidy Margrit: Annemarie Schwarzenbachs *Tod in Persien* und Gertrude Bells *Persian Pictures*. Verborgene intertextuelle Bezüge. In: Decock / Schaffers (2008) S.103-130.

に山から山を蔽ってしまっている。[21]

そのように寂しい土地だが、ベルの旅行記は、『幸せの谷』で曖昧にされた、高級リゾートとしての側面を詳しく描いている。

しかし、谷の住人は遊牧民だけではない。もっと贅沢な野営地が一つ二つある。インドのさる王子がキャンプを張っていて、そばを通ると釣竿を手にしたまま愛想よく「グード・イヴニン、サア」と声をかける。〈中略〉

またペルシアの貴人は夏の暑さをこの涼しい隠れがに避けており、川端にフランスあるいはインド製の手のこんだテントを張る。三、四十頭の馬を野天で飼い、魚釣りに出かけるときでさえ連れてきた大勢の従者にお供をさせて、馬でまわって歩く。〈中略〉お歴々は、ご婦人がたも伴っている。気ままな孤独を楽しめるこんなところですら、白いキャンバスの壁が、捕らわれの立場を逃れられない妻たち娘たちのテントのまわりに張りめぐらせてある。〈中略〉山中にあっても、自分の庭園や館にいるのと同じようにくつろぐ。その豪勢な鷹揚さは、すばらしい自然にそぐわないものではない……[22]

ベルはさらに、一マイル下流の王女とその娘たちのキャンプを訪問して、そこでレモン・アイスクリームを振る舞ってもらったことや、その娘の一人が、ベルの少し上手に野営するペルシア貴族へ嫁ぐことになった話を報告している。[23] 本来の住民である遊牧民を別にすれば、ラール谷での避暑は王侯貴族たちの娯楽だったわけだ。ベルが描写する昔とは政治状況が違うので貴人たちの様子は同じでなかったかもしれないが、この地は 1950 年代または 60 年代にダムができるまではインフラのない僻地だったので、シュヴァルツェンバハが訪ねたときも、風景や特権階級のリゾートという性格は同じだったはずである。[24] ベルが記録しているような王侯貴族のリゾートが舞台であることを知らなければ、『幸せの谷』の主人公が身を置く状況は読者に理解しがたい。

---

[21] ガートルード・ロージアン・ベル『ペルシアの情景』田隅恒生 訳、法政大学出版局 2000 年、62 頁。原本の表題の「サファル・ナーメ」は「旅の書」を意味するペルシア語。1927 年に本名で再刊した際に表題を『ペルシアの情景（*Persian Pictures*）』に改めた。

[22] 前掲書、65-66 頁。

[23] 前掲書、74-76 頁。

[24] シュヴァルツェンバハについてのドキュメンタリー風の映画『カフィリスタンへの旅』が作られた際に、彼女が訪れた時代との異同を確認する現地調査が行なわれている。Dubini, Fosco: Zur Entstehung eines Films über Annemarie Schwarzenbach. In: Fähnders / Rohlf (2005) S.187-196, hier S.194.

ちなみに、ベルの恋人はイギリス公使館の書記官だったが、マス釣りをしていてラール川に落ち、そして肺炎で亡くなったという。自然の厳しさを思い知らされるエピソードである。ところで、ベルのこうした魅力ある描写に触れると、ラール谷という舞台こそが『幸せの谷』を傑作にした一番の要素ではないかと思わせられる。

幸せ

王侯貴族の避暑地であるラール谷での生活はもちろん贅沢なものだ。『幸せの谷』では身の回りのことを使用人にさせ、動物の糞の代わりに遠くから取り寄せた木炭を燃やし、天幕の下のテーブルを親しい者たちと囲む。ともあれ高級ホテルはおろか、遊牧民たちの使う小屋の他には建物すらない荒野であり、自然の壮大さを前に人間の卑小さが身に沁みるという側面も大きい。最初の引用にあるようにガレ場からひっきりなしに石の流れる音がし、日差しは強烈で、川を流れる雪解け水は凍れるほど冷たい。シュヴァルツェンバハは、凶暴な自然に苛まれて力尽きつつある主人公の姿を丹念に描く。そこで疑問に思われるのは、なぜ「幸せの谷（ein glückliches Tal）」と呼ぶのかである。

注目されるのは、谷で自然に打ち負かされようとしている主人公が、その自然について「敵対的（feindlich）」ではないと何度も主張するところで、「敵対的なのでは決してなく、単に大きすぎる！」[28]と繰り返す。[25] 元の『ペルシアでの死』では、やはり「周りの風や山々は敵対的では決してなく、単に大きすぎる」と記したのに続けて、「そのなかで人は見捨てられ、だから全て無意味で、労苦を風が運び去る…」[26] と、人間のはかなさを憐む。そして「草と水と魚が豊富で、町から遠く、阿片窟から遠い」[28]という理由でもって「幸せの谷」と呼ばれる。つまり自然が凶暴であろうとも、町から隔絶され、豊かな自然に満たされているから、ここは「幸せの谷」である。町あるいは文明の否定が根本にある。

町は第一にテヘランを指す。紹介した通り、シュヴァルツェンバハはマラリアにかかり、ここへ連れてこられた。その経緯は小説でも同じである。そしてシュヴァルツェンバハはこの小説を麻薬中毒を治療するためにクリニックに隔離されている状態で書いた。つまり直接的にはテヘランの暑さとマラリア、そして麻薬から距離を置けることが「幸せ」を意味する。もっともそれだけにとどまるものではない。小説の終盤では趣を異にして、悲しい終りを迎えた恋との対比で「幸せの谷」が強調されることになる。この「幸せ」については後ほど改めて取り上げる。

---

[25] 例えば、「この空は敵対的なのでは決してなく、単に大きすぎる！」[26]、「大地は決して敵対的でなく、ただ大き過ぎた」[113]

[26] Annemarie Schwarzenbach (1998) S.39.

シュヴァルツェンバハ家とナチス

主人公はラール谷にいても、広くその周辺地域を語る。そこで、いわゆるオリエントがシュヴァルツェンバハにとって何だったのかを確認しておきたい。

前回の拙論ではこの作家をめぐる状況を、生い立ち、母とマン姉弟との間での板挟み、および山との関係で解説した。多少重複するが、彼女の家庭事情、すなわち『幸せの谷』で扱われているオリエントに対置されるべきだが描かれてはいないオクシデントについてまとめ、それを踏まえて彼女の四度にわたるオリエント旅行を紹介することにする。

ことわっておくと、『幸せの谷』という小説を楽しむのに背景を知っている必要は全くなく、実際、作品のみと向き合うのに近い姿勢の論考も少なくない。しかし筆者が注目するのは亡命文学者シュヴァルツェンバハであり、オリエントを舞台にした一見かなり没政治的な小説を読むにあたっても、語られずともまぎれもなく対蹠物として存在するオクシデントである。彼女にあってそれはチューリヒの家庭およびファシズム化されたヨーロッパであり、ここではそれを視野に入れておく。確認したいのは、シュヴァルツェンバハ家が右翼的で、ナチスの協力者だったことである。

アンネマリー・シュヴァルツェンバハは母方ヴィレ家から、軍人気質と同時に、文化的な影響を受けている。[27] 祖母クララの父（アンネマリーの曾祖父）はフリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・ビスマルク伯爵で、かの鉄血宰相オットー・フォン・ビスマルクはクララの従兄弟にあたる。クララは将校のウルリヒ・ヴィレと結婚、この夫がやがてスイスの陸軍大将に上り詰めるのだが、ヴィレ家は18世紀にスイスからドイツに移り、1848年の革命の結果としてスイスに戻った親独的な家庭だった。そこで育ったクララの娘ルネがたいへんな男勝りで、乗馬の達人だったことは前回詳しく述べた。ヴィレ家は優れて文化的でもあって、ウルリヒ・ヴィレの母エリツァは詩や小説を書き、コンラッド・フェルディナント・マイヤー、ゴットフリート・ケラー、テオドール・モムゼン、アルノルト・ベックリン、フランツ・リスト、リヒャルト・ヴァーグナーらと交友があったという。だからルネは乗馬のみならず音楽も、とりわけヴァーグナーを熱狂的に愛好した。こうしてアンネマリーの母ルネに受け継がれた軍人気質ならびにヴァーグナー趣味が、シュヴァルツェンバハ家とナチスを繋ぐことになるのだが、その話の前に父方も紹介しておこう。

ルネの夫（アンネマリーの父）はアルフレート・シュヴァルツェンバハで、祖父が興し、父が欧米各地に支社を展開させた絹織物の企業を継いだ。法学を学び、ライプチヒ大学で博士号を取ったインテリでもあり、各国で事業を営む資本家として広く世界を視野に入れていた。また

---

[27] 彼女の母ルネを取り巻く状況については次を参照している。Schwarzenbach, Alexis: *Die Geborene. Renée*

アルフレートの父はチューリヒ近辺を代表する名士として、日曜毎に五十名ほどの客を招待して音楽の夕べを開催するなど、音楽・演劇の催しを開くことに熱心だった。この父が評議員を務めたチューリヒ音楽堂（Tonhalle）は、1895年10月にブラームスを迎えて落成式をし、その後も優れた催しの会場となったのだが、その背景に装飾・舞台装置代を音楽堂側が持つという手厚い保護があったことが知られている。芸術の保護者シュヴァルツェンバハ家にも著名な文化人たちが訪れた。

アンネマリー・シュヴァルツェンバハの生まれ育った家庭は、軍事の中枢に関わるヴィレ家と、国際的資本家のシュヴァルツェンバハ家を結び合わせたものだった。この家庭環境は彼女に様々な優れた特性をもたらした。男勝りな性格と、優れた運動センスと、「薔薇の騎士」のオクタヴィアンの仮装が似合う容姿、国際的視野と博士になるほどの学識、さらにはプロになるかと期待されたピアノとダンスの才能と、詩的な美しい文章を書く能力。

その一方で、両親や叔父、祖母たちがナチスを受け入れるという厄介な事態になる。なぜなら、スイスの国防を担う責任感からはドイツの民族主義的勢力と良好な関係を持つのが、資本家の立場からはドイツの再軍備と復興を推し進める勢力を後押しするのが合理的であり、さらに両家の親ドイツ的傾向と、ルネのヴァーグナー好きがそれを補強したからである。

ヴァーグナーの方から見ていこう。1910年10月、ルネは歌手エミー・クリューガーと知り合い、長期にわたる家族ぐるみの愛人関係を結ぶ。ちなみにルネとアルフレートは恋愛結婚だが、ルネは女性に恋することのほうが多かった。クリューガーは1911年3月に初めての大役、同年1月にドレスデンで初演されて大成功を収めたホーフマンスタールとR・シュトラウスによる「薔薇の騎士」のオクタヴィアン役をチューリヒで務め、一躍有名になる。ルネはクリューガーの実生活における、いわばヴェルデンベルク侯爵夫人だった。1922年のチューリヒの音楽祭でクリューガーはヴァーグナーの「トリスタンとイゾルデ」のイゾルデ役になり、それが評価された彼女はバイロイトのリヒャルト・ヴァーグナー音楽祭に招かれる。これはヴァーグナー好きのルネを熱狂させるできごとだったが、これによりクリューガーはアドルフ・ヒトラーにも感銘を与えることになる。

もっともクリューガーの出世には特別な事情があった。それはいわゆるバイロイト音楽祭が第一次世界大戦の始まった1914年を最後に休止状態にあったことで、ジークフリート・ヴァーグナーは再開に必要な資金を集めるためにルネ・シュヴァルツェンバハに取り入ったのである。とはいえルネがクリューガーのためにヴァーグナーを買収したと考えるのはうがった見方だろう。ヴァーグナーが音楽祭の再開を文化国家としてのドイツの再興と位置付けたので、その支

Schwarzenbach-Wille und ihre Familie. Zürich 2004.

援はルネの心にかなう行動だった。十年ぶりに復活した 1924 年の音楽祭で、クリューガーは「パルジファル」のクンドリ、「ニーベルンクの指輪」のジークリンデを演じた。

記念すべきこの 1924 年の音楽祭にヒトラーは立ち会っていない。彼はミュンヘン一揆後、この年の末まで刑務所にいた。しかしヴィニフレート・ヴァーグナーとヒトラーは 1923 年から親交を結んでおり、ヒトラーは 1925 年の音楽祭を訪れて、この年もジークリンデ役で賞賛を浴びたクリューガーとも知り合った。ヒトラーは彼女の手にくちづけし、「お美しい (so Schönes!)」と言ったそうだ。収監されているヒトラーに原稿用紙を届けるなど世話を焼いたヴィニフレート、ヒトラーを魅了したエミー・クリューガー、彼女らの後援者だったルネ、彼女らはヴァーグナー劇を仲介にして、ヒトラーに親近感を抱いた。

その後ヒトラーは政権を取るまで公式にはこの音楽祭を訪れなかったので、そこで彼とルネが出会うことはなかったが、彼女とナチスの関係はすでにそれ以前からあった。仲介者は地政学者カール・ハウスホーファー[28] である。ミュンヘン大学のハウスホーファー教授は、ひいきの学生ルドルフ・ヘスを通じてヒトラーを知り、1920 年にはルネに、「ことを成そうとしている者たちにあなたを引き合わせたいのです」[29] と話した。実際、ヘスが 1922 年の冬学期に工科大学チューリヒ校で学んだ際、ヘスはハウスホーファーの紹介により、ルネの兄ウリ・ヴィレと会っている。[30] もちろんヘスはこの時期にナチスの仲間たちを連れてシュヴァルツェンバハ家を訪れてもいる。ウリはヘスを気に入って、毎週のように昼食に招待したばかりか、ドイツ海軍のティルピッツ元帥と画策してバイエルンに独裁政権を作り出そうとしていたので、この計画にヒトラーをどう利用できるか判断しようと 1922 年にヒトラーに会いにミュンヘンまで出かけている。そしてヒトラーを高く評価したウリはナチスに資金を提供した。翌年 8 月にはヒトラーのほうがさらに資金を引き出そうとスイスを訪れてウルリヒ・ヴィレ夫妻を訪問している。ヒトラーの熱い語り口にウルリヒの妻クララは魅了されたが、ウルリヒは気に入らなかった。このときのスイスでの資金集めは成功しなかったらしい。[31] その直後バイエルンではウリ・ヴィレたちの思惑通りにことが進み始めるが、ミュンヘン一揆に終わる。

1926 年初め、ヘスは一揆後初めてウリ・ヴィレに連絡をとり、やはり資金調達のために出版人ブルックマン夫妻を遣わした。彼らはシュヴァルツェンバハ家も訪問している。新婚のヘス

---

28 ヒトラーに生存圏の理論を説いた人物。モアビート・ソネットのアルブレヒト・ハウスホーファーの父。

29 Alexis Schwarzenbach (2004) S.167.

30 ドイツ陸軍を少将まで勤め上げたハウスホーファーは、ウルリヒ・ヴィレの思想を学んだばかりか、面識もあった。ヴィレ家の当主ウリはウルリヒの息子。

31 ウリ・ヴィレが 1922 年にミュンヘンでナチスに二千スイスフランを提供したことについては裏付けがあるが、アルフレート・シュヴァルツェンバハやウルリヒ・ヴィレがいくら提供したのか、そもそも渡したのかは不明である。

が広めの住居に引っ越して三千マルクを用立てる必要が生じ、ヒトラーがそれを与えた際にも、それにより失われた党費を補填するために、ヴィニフレート・ヴァーグナーがアルフレート・シュヴァルツェンバハに相談している。また1927年12月にはヘス自身がシュヴァルツェンバハ家を訪れている。ヒトラーの信奉者ヴィニフレート・ヴァーグナーとヒトラーの指南役ハウスホーファーを通じて、ナチスがシュヴァルツェンバハ家に深く食い込んでいたことがわかる。そうした経緯もあってか、1927年のバイロイト音楽祭でクリューガーはイゾルデ役を射止め、絶頂期を迎える。[32]

しかし1929年10月、ニューヨーク株式市場で株価が大暴落し、世界規模の大不況が吹き荒れる。1926年にマンハッタン四番街の十七階建て自社ビル入口に「シュヴァルツェンバハ ―織機一万台」[33] と掲げて、生産力で世界一の絹糸メーカーだと誇示したばかりの大企業が、一気に凋落し、数年後には廃業を検討する事態になった。[34] それと対照的に勢力を拡大したナチスにとり、シュヴァルツェンバハ家の利用価値はなくなったはずである。エミー・クリューガーも1931年に引退する。ただし彼女やルネのナチスへの共感は続いた。[35]

オリエント旅行

シュヴァルツェンバハ家とナチスとの結び付きは歴史的に重要でないが、これが亡命作家アンネマリー・シュヴァルツェンバハの育った家庭だったことは興味深い。彼女にとってウリ・ヴィレは近所に住む伯父さんで、祖父ウルリヒからはヒトラーの印象などを聞き、クリューガーの舞台を観るために母ルネに連れられてバイロイトにも通った。従ってシュヴァツェンバハは前節で紹介した事柄の大部分を知っていて、その上で、ヴァーグナー好きながらナチス嫌いのトーマス・マン一家に共感を抱いたのである。そして彼女は、シュヴァルツェンバハ家とマン家の正面衝突を避けるかのように、オリエント[36] にのめり込んだ。彼女にとってのオクシデントは、ナチスに協力する実家であり、実家とマン家との対立であり、ファシズム化した世界

---

32 エミー・クリューガーのイゾルデ役は、発声の不明瞭さなどが指摘されて、評判が芳しくなかったようである。ただしコージマ・ヴァーグナーは、「これはマイスターがイゾルデについて思い描いていた通りよ」と評している。Ebd., S.205.

33 「Schwarzenbach – 10.000 looms」というプレートは今も掲げられたままである。

34 五年ほどで生糸価格が五分の一に下がり、生産量は六割減少した。人絹市場への参入が遅れたことで、その後も再興の機会を逃した。

35 ルネはナチスの政権獲得を喜んだが、夫のアルフレートは、ヒトラーの政権はドイツでの商いに悪影響を及ぼすと警戒していた。

36 オリエントという言葉は曖昧で、親友のエーリカ、クラウス・マン姉弟が京都まで足を伸ばしているので、シュヴァルツェンバハ自身の語感では極東まで含むかもしれないが、本稿では彼女の行動範囲に限定して、トルコからインド西側の国境地帯までを指すものとする。

だった。

さてシュヴァルツェンバハのオリエント旅行は四度にわたる。まず1932年にマン姉弟にリッキー・ハルガルテンを加えた四人で計画したペルシャ旅行はハルガルテンの自殺で頓挫する。一度目はその翌年からで、1933年10月にジュネーブをオリエント急行で発ち、[37] トルコからシリア、ベイルート、ダマスカス、イェルサレム、バグダッド、テヘランなどを訪れて、翌年の4月末に帰国している。[38] 考古学調査隊による発掘を見学したりしているところに、自分のやるべきことを模索する様子が見てとられる。

同年8月のモスクワでの作家会議に出席した後、シュヴァルツェンバハは9月から12月にかけて再びテヘランに赴き、発掘に携わる。これが二度目のオリエント旅行で、夫となるテヘラン駐在のフランスの外交官クロード・クララクと知り合ったこと、旅行中の11月にチューリヒで胡椒挽き事件が起きたことが、この二度目を特徴づけるできごとである。

大きなストレスを抱えた彼女は1935年1月に麻薬中毒の治療を受け、その途中で自殺を試みる。そして2月末、クララクとの結婚を決断する。4月にベイルートで彼と再会し、5月にテヘランで結婚式を挙げた。[39] これが三度目のオリエント旅行である。7月、マラリアの高熱で床についているとき、トルコ大使の娘ジャレが見舞いに訪れる。ジャレは家庭内不和と不治の肺病を抱えていて、[40] ジャレとシュヴァルツェンバハは恋に落ちる。これが『幸せの谷』最終章の題材である。この恋はスキャンダラスであり、クララクはテヘランから離れるべく、妻をラール谷へと連れていく。シュヴァルツェンバハはジャレの死などによる精神的危機を、クラウス・マンと暮らすことで乗り越えようとし、夫も協力してマンを呼び寄せようとしたが、マンはビザを得られなかった。それで同年10月、彼女は夫を置いてヨーロッパに戻った。

1936年はエンガーディンの山小屋でマン姉弟やフリッツ・ランツホフやテレーゼ・ギーゼたちと過ごしたり、その傍のホテルにトーマス・マン夫妻が滞在したり、マン姉弟らと車でスペインなどへ旅したりして、亡命者たちとの交流を深めた。その後の活発な活動については前号を参照していただきたい。そして1935年の原稿を元に1938年から39年にかけてスイスのイヴ

---

37 独り旅ではなく、エーリカ・マンを通じて知り合ったアルフレート・パステルネクを伴って出発した。その後も発掘隊などと一緒に行動している。

38 移動手段は船など様々。ダマスカスからイラクに移動する際には、『幸せの谷』で描写しているように、飛行機で移動している。

39 結婚でアンネマリー・クララクとなり離婚することはなかったが、殆ど別居状態で、シュヴァルツェンバハを名乗ることが多かった。

40 母がジャレを置いて家を出た。母を愛人にした人物は裕福な詩人で、母はジャレを連れ出して詩人の元に住まわせたこともあったが、ジャレの病気が再発すると父のところに戻された。父はジャレに対して複雑な感情を抱いていた。シュヴァルツェンバハはそう記している。Annemarie Schwarzenbach (1998) S.82f. u. S.87-89.

ェルドンにある療養所で仕上げられた『幸せの谷』は著者自身の撮影した風景写真入りで 1940 年初めに出版されている。四度目のオリエント旅行はこの小説を書いた後である。彼女は車を新調し、1939 年 6 月に冒険家エラ・マイヤール[41] と二人でジュネーブをカブールに向けて出発し、カブールで第二次世界大戦勃発の報を受け、そこで一旦マイヤールと別れたものの、インドで束の間再会し、翌 1940 年の 1 月初めにヨーロッパに戻っている。女性二人で車を運転してイラク、アフガニスタンを旅するのは、今では不可能に近い冒険だけに注目されることが多く、たとえば映画『カフィリスタンへの旅』が作られている。[42]

四度のオリエント旅行を、その前後および最中のできごとを大幅に省いて紹介したが、これが物見遊山でなく、中近東に特別な意義を見出していたことはわかるはずである。その意義には逃避という消極的側面もあれば、生き方や文明のあり方の探索という積極的な面もあった。

自分探し

前提の紹介が長くなってしまったが、ここから『幸せの谷』と向き合うことにしたい。自然に苦しめられる様子とジャレとの愛の間に挟まれ、半ばで展開されているのが、何者になればよいのかというとまどい、何者でもない自分への焦りである。そうした想いを喚起する事情が様々な次元で存在することは、これまでに紹介した諸々の事情からわかってもらえるだろう。

舞台は最初に詳しく紹介した通り、社会から隔絶されたラール谷である。一人称で語る主人公が、そこと対比されるものとして挙げるのはラジオや映画で伝えられる情報で、株式市場であったり、エチオピアやスペイン（バルセロナ）や中国（上海）での戦闘であったり、ベルリン五輪のマラソンで日本代表として優勝した、植民地出身の孫基禎（ソン・ギジョン）であったりする。時間を超越したような情景を描きつつも、現代の戦争が視野に入る。具体的なファシズム批判はないが、西洋的世界を踏み出た立場にあることが強調されている。

極めて非難されるべき考え！ 西洋人なら言わないはず！ わたしはキリスト教の考え

---

41 パリ五輪のレガッタでスイス代表。ホッケーやスキーでも活躍し、1932 年には天山山脈の五千メートル峰に登頂、1934 年には満州国に行っている。カブールで別れた後はインドで修行し、第二次世界大戦が終わるのを待ってヨーロッパへ戻り、亡くなるまでスイスの標高二千メートルの山村に住んだ。シュヴァルツェンバハと共通するところが多い。早くも 1938 年に旅行記の邦訳が出ており、最近も介護人による晩年の記録が邦訳されている。シュヴァルツェンバハについて著作がある。エラ・マイアール『婦人記者の大陸横行記 — 北京よりカシミールへ』多賀善彦 訳、創元社 1938 年。アンヌ・ドゥリア『いとしのエラ — エラ・マイヤールに捧げる挽歌』鈴木光子 訳、BOC 出版部 2009 年。Maillart, Ella: *Der bittere Weg. Mit Annemarie Schwarzenbach unterwegs nach Afghanistan.* Bern 2001 (*The Cruel Way.* London 1947).

42 ルートが異なる点、三度目のオリエント旅行のエピソードを取り込んでいる点が実際と大きく違うが、雰囲気の再現には成功していると思われる。映画と事実の対応についてはDubini (2005)を参照のこと。

方の基本を忘れたのだろうか？

だけどわたしは西洋の習慣に背を向けた。だからわたしは自問する。彼らはあそこでどれだけ犠牲を払って魂の平安を得るのだろうか？[69]

民族全体が精神病になる。個々に「作業療法」で治療され、ふつうの生活に連れ戻される。**ふつうの生活**…その根っこはどれほど深いのだろう？ 何を源に育つのだろう。[70]

民族、犠牲、精神病、作業療法といった言葉で、ファシズムとそこからもたらされる戦争を暗示しているように読める。ただし小説のテーマはオクシデントから距離を置いた達観で人生を捉えることにある。

わたしは子どものときから変わっていない。同じ憧れ、同じ疑いを抱いている。今は用心しているだけのこと。あのころは全ての道が開かれていた。わたしはどうしてそれに満足しなかったのだろう。どうしてこうも執拗に回り道をし、誤った道を行かねばならなかったのだろう。そして全てはこの高地、この「幸せの谷」で終わる。引き返す道はもうない。[16]

一つのことにしか興味が持てない、もしくは一つのことにしか才能がないのであれば、進むべき道は決まっている。だがシュヴァルツェンバハは多芸に秀でていた。ピアノ、ダンス、乗馬、文筆、写真、歴史学、そのうちいずれを選んでも生計が立ったのかもしれない。そうだからこそ、彼女はどっちつかずの人生を歩むことになった。彼女と同じ欠点を主人公は抱えていて、それで袋小路であるらしいこの谷にたどり着く。生き方の選択肢が多くて悩むという状況は現代的で、この自分探しというテーマこそが今の読者に受け入れられる理由であろう。

発掘現場にとりあえずの居場所を見出していた主人公がそこを去る。ちゃんとした仕事を持ち、ちゃんとした生活を築こうとしないことを責められるのを主人公は恐れる。野垂れ死にを否定してまともに生きること（ふつうの生活）を求める圧力が、主人公にとっては脅迫にも近いものになる。

君らが死刑を宣告したところで、わたしはまつげをぴくりとも動かさないだろう。

「こいつはよい教育を受けた。愛情ある両親と、理解ある教師と、公正な上司に恵ま

れた。何不自由なかった。まだ二十歳[43] になったところだ。動機は不明だ。穏かな環境であろうか？」[80]

しかし主人公には自分を客観的に見直す機会がある。発掘現場の同僚でカメラマンのビベンスキーは、一緒にハシシを吸いつつ、主人公にこう話す。

「最悪の人生ではなかった。だけど君は思い違いをしている。皆が思い違いをしている。わたしがこの仕事をしているのは、時間を追っ払うため、それと金を稼がなきゃならないからだ。実はわたしは陛下の、つまりツァーの士官候補生だ。そしてそのことだけが重要だ。ひょっとすると君はまだ若過ぎて、人生ではたった一つのことがらが重要だということを、まだ理解しないかもしれないが」[132]

故郷キエフの鐘の音や、士官候補生だったという遠い日々に思いを馳せ、日々の仕事や健康を嘲笑い、ハシシによって死に急いだビベンスキーの生き様が、主人公を我に返らせる。主人公もいい加減な気持ちで発掘に関わり、麻薬に逃げ込む同類だが、ビベンスキーが惨めに思えたからである。ここで物語は最終章を残すのみとなる。

克服

ラール谷に行く理由は、小説ではマラリアだが、作者の実生活ではジャレとのスキャンダルである。だから次第にこの恋が話の中心に移る。ジャレという名前がようやく明かされて具体的な描写になるのは最終の第十三章である。この章にだけ小見出しが付いて、「愛の試み」、「魔力（Magie）の拒絶」、「天使」の三つに分けられている。ここでようやく物語の全体像が浮かび上がる、わかりにくい小説となっている。

読み取り得る全体像を簡単にまとめておく。マラリアで衰弱している主人公の前にジャレというチェルケス人の娘が現れ、二人は恋に落ちる。ジャレは不治の病にあって死を覚悟しているのに対して、ジャレから見れば主人公には生きる意欲がある。その差からジャレは一緒にいることはできないと主人公を諭し、ラール谷へと送り出す。主人公はそこで孤独と過酷な自然と向き合い苦しみ、やがてジャレの死を知る。「魔力」あるいは「毒」という別名で呼ばれる麻薬を克服すべきことが繰り返し語られ、ラール谷の生活には麻薬中毒治療のイメージが重ねられている。最終章での主人公とジャレや天使との対話は、Sofie Decock と Uta Schaffers が論じ

[43] 直後に「三十歳」とあるので、作者とほぼ同じ三十歳の誤りであろう。

るように、主人公が自身と向き合う様子を描いている。[44] 冬が近づき、遊牧民たちは下の豊穣な大地と町に戻る。主人公もまたそれに倣う。谷から町へ、自然から社会へ戻る。

これからどう生きていくのかはわからないが、主人公はかつてのジャレとの対話を振り返り、自身の内に生きる意思を再発見し、谷を下る。客観的には高級リゾートライフを送ったのだとはいえ、心の内を整理した点では修行を終えたかのようである。Sabine Rohlf によれば、ラール谷という世の果てにやってきて、最後の最後に逃路が開ける。[45] 主人公の心情に寄り添うなら確かにその通りだが、生きる意欲があるからこそ谷に送られた主人公が谷から戻るのは規定の行動でもある。ラール谷滞在は主人公にとって生きることに前向きになるための儀式だったと言える。

谷の役割を確認したところで、改めて「幸せ」について考えたい。ジャレとの対話の中で、主人公はこう言う。「ジャレ、君は幸せ（Glück）について考えると言うけど、死（Tod）と浄福（Seligkeit）に穏やかな呼び名を付けたんじゃないの？」[143] この直前でジャレの語る「幸せ」は急流を流れ下りやがて大地に広がる「川」で、それはまさしく死のイメージであり、主人公の指摘はもっともである。元の『ペルシアでの死』では、その直前でジャレが、病はわたしを川のように運び去る、[46] と語っており、前述の大きすぎる自然と不治の病が関連付けられている。一方でマラリアは治癒可能で、主人公にあっては死に至る病でないから、主人公は自然に運び去られはしない。自然の大き過ぎる幸せの谷で川のごとく運び去られるのが死ぬことであれば、次はRohlfの先の主張そのままだが、世の果てのこの谷から立ち去る道を見出してそれを辿るのは生に立ちかえることである。隔絶された果てに身を置くのが幸せで、そこは死生の分かれ道である。谷から見る下界は生の世界なのだから、谷は死への入り口である。生が死の裏返しとして存在するほど死に支配された世界で、主人公はジャレが死んだと直感する。

> ずっと後になって、幸せの谷のテント陰で、再び独りで、未だかつてないくらい独りきりで（わたしは君に出会ってそして君と別れたのだから）、わたしはヘルダーリンの文章を読んで、なぜだか思いっきり泣きだした。こうも揺さぶるものは君の死だ、とわたしは思った。だけどそれは忘れていた生命の響きだった。[139]

打ちのめされていた主人公は、これをきっかけに生きる勇気を、ジャレ無しでも生きてゆく勇気を得る。最後に天使が登場する。それは救いを与えるためではない。天使は「わたしはお前

---

[44] Decock / Schaffers (2008) S.57ff.
[45] Rohlf (2001) S.151.
[46] Annemarie Schwarzenbach (1998) S.85.

の保護者ではなく、この地の天使に過ぎない。わたしがお前を責めているなどと思うな」[154]と語る。先に述べたように、これは実際のところ主人公の自問である。

> 「残念だが」と天使はあっさり言った、「お前の苦しみが現世の本で列挙されることはないだろう。それは不公平なのかもしれないが、しかし、命懸けの戦いが行われていて、それでいて人間の目に捉えられない戦場があるのだ。そして公平な結末を決めるのは、わたしたちだけだ」[153f]

朝になり天使が消えると、テントが畳まれ、荷造りがなされ、主人公は下り始める。ラール谷は世の果てだから、生き続ける者は引き返さねばならない。[47] 最後の段落には、下界への憧れ、つまり生き続けるという結末が見て取れる。

> わたしは鞍の上で前屈みになり、耳を澄ませた。ずっと遠くでキャラバンの鈴の音が聞こえる。目を皿にした。友よ！ 友よ、見よ！ けぶっている悲惨丘の向こう、地平線で、すてきなキャンバスが揺れている！[157]

巨大な否定感とささやかな希望の切ない対比は、シュヴァルツェンバハの抱えていた重荷の重量感と、そこから歩み出すことの困難さを反映している。西洋を飛び出して自身を徹底して省みようとする姿勢と、彼女独特の叙情性あふれる文体が感動的な作品世界を生み出している。反ファシズムの立場でのアンガージュマンの問題を超えて、政治的な議論ではすくい上げられない心の問題と向き合い、自己否定感と死への誘惑という人間の目に捉えられない戦場での命懸けの戦いを描いている点は、反ファシズム文学という政治的観点から評価しにくい。しかしそれでも人は政治的闘いのなかにあってさまざまな地平で葛藤するものなのであり、反ファシズム文学として高く評価されてしかるべきだろう。

---

47 『ペルシアでの死』では天使が二度現れ、二度目にそのように宣告する。Ebd., S.114.

Selbstsuche im Orient
— Annemarie Schwarzenbachs Roman *Das glückliche Tal* —

TAKEDA Yoshiki

Das glückliche Tal ist sicherlich der beste Roman Annemarie Schwarzenbachs. Über ihn gibt es inzwischen viele wissenschaftlichen Arbeiten, wobei seine geschlechtsunbestimmte Hauptperson und die homosexuelle Atmosphäre besondere Aufmerksamkeit auf sich zogen. Nur wenn das Geschlecht unbestimmt ist, kann man nicht wissen, ob die Liebesbeziehung der Hauptfigur zu einer Tscherkessin homosexuell oder heterosexuell ist. Die bisherige an der Homosexualität orientierten Forschungen ist also problematisch. Viel wesentlicher scheint mir dagegen die Zweideutigkeit des Romans, weil sein Thema die Sehnsuchnt nach dem Tod ist und eine solche Sehnsucht immer vage bleibt.

Obwohl dieser Roman fast nur das Leben in Nahost beschreibt, sehe ich als seinen Hintergrund doch auch die enge Beziehung zwischen der Schwarzenbachschen Familie und der NSDAP. Der Vater der Autorin war ein Großkapitalist, ihr Großvater mütterlicherseits ein General, ihr Onkel mütterlicherseits ein Gönner Adolf Hitlers, ihre Eltern unterstützten zudem wohl dessen Partei und ihre Mutter war Wagnerverehrer wie Hitler. Diese Korrelationen werden zwar im Roman nicht erwähnt, aber Schwarzenbach, als anti-faschistische Schriftstellerin, nahm diese Last auf sich und ihre Leiden daran sind im Roman deutlich ablesbar.

Das Glück des glücklichen Tals ist doppeldeutig. Zum einen bezieht es sich auf die Distanz zur Stadt, zur Hitze und zum Opium, und zum anderen darauf, dass dieses Tal am Ende der Welt, also am Ende des Lebens ist. Als die Hauptfigur nach langer Verzweiflung hier endlich einen Ausweg fand, war dies der Weg zum Leben, weil er sich vom Ende der Welt, also vom Tod, entfernte. Mit diesem doppeldeutigen, unbestimmten Glück beschreibt Schwarzenbach sehr

beeindruckend die unklare Welt der Sehnsucht nach dem Tod. Die Leiden der Hauptperson spiegeln auf diese Weise diese Sehnsucht und gleichzeitig die innere Belastung der Anti-Faschistin Schwarzenbach überzeugend wider.